



# NEWS LETTER

## 本学での女性研究者の役割や ワーク・ライフ・バランスについて、 トップインタビューを行いました。

- Q1 先生の座右の銘を教えてください。
- Q2 ご自身のワーク・ライフ・バランスについてどう思われますか？
- Q3 少子高齢化時代の女性研究者の役割について  
お考えをお聞かせ下さい。
- Q4 2020年までに女性研究者比率を20%にするのに  
どんなことを実行しておられますか？
- Q5 女性研究者へのメッセージをいただけますか？



### 北嶋 繁孝 難治疾患研究所長／遺伝生化学分野教授／女性研究者支援対策会議運営委員

**A1** 「至誠」です。自分自身や周りに対して誠実であったか問いかけるようにしています。実際は、出来ていないので努力目標というべきですが。

**A2** 留学先のアメリカと日本で、私自身、ワーク・ライフ・バランス(WLB)で悩むことはなかったように思いますが、一人娘との時間をもっと大切にしていたらよかったかなと反省しています。今の若い人には、是非、男性も女性も育児や家族との時間を大切にしたいですね。一方、研究には多大な時間を要します。では、どうするか？それは、研究が生活の一部になるほど「研究が好きであり、楽しみである」状態になることです。そうなれば、自分の競争力を保ちながらもメリハリのある時間の使い方を工夫するし、家族との触れ合いを大切にできる時間もできる。結果、満足すべきWLBが出来上がるのではないのでしょうか。研究者には常に競争が強いられますが、研究を楽しむ姿勢が

自分と周りとのWLB実現につながるかと思います。

**A3** 女性研究者の役割は十分すぎるほどあって、貢献できる研究環境は整備されつつあると思います。さらに加速させるのは、理解し支える上司の意識改革です。幸い、昨今の女性は目的意識が高く、本学の意識も高まっていますので道筋は整ってきていると思います。

**A4** 去年は難研で女性の西村教授をお迎えしましたし、テニユアを目指して頑張っておられる女性研究者もおられます。公募の際には、女性の方の応募を促すことを必須としていますし、女性優先ポストの公募もあり得るか考えます。

**A5** 研究者は「職人」だと思っています。つまり、性別に関係なく研究者としての職人になって場数を踏むことが大事です。研究は「やってなんぼ」ですので、競争は激しいですが、どんどん挑戦して、男女とも等しくキャリアアップのチャンスを得て欲しいと思います。



### 山下 仁大 生体材料工学研究所長／無機材料分野教授／女性研究者支援対策会議運営委員

**A1** 「万事塞翁が馬」です。長い人生の中で起こる物事に一喜一憂するのではなく、すべてのことをチャンスと捉えています。

**A2** いわゆる会社勤めに比べれば、研究者は自由に時間を使えるので、研究と家庭との両立はして来たように思います。2人の娘がいますが、夜泣きのときに妻を手伝いましたし、娘が発熱した際、看病しながら横で論文を書いたこともあります。おんぶしているときに、研究のアイデアが浮かぶこともありました。

**A3** 自分の分野では、私以外の教員3名はすべて女性です。3人ともいづれ、教授になって欲しいと思います。特に物を作る工学系の世界では、生物学との接点が多くなり、新しい学際的な領域として展開されてきています。それには、女性ならではのこれまでと違った価値観が不可欠ですし、女性もこの分野に進出しやす

くなってきたように思います。

**A4** 公募の際、男性と女性の業績がほぼ同じであれば女性を優先して採用することにしています。また、特任教員の方で、タイミングと希望が合えば、学内の常勤職に移行する方法を実行しています。これからは様々な社会の分野で、女性比率が50%になるよう、活躍してほしいと思います。

**A5** 物事に一喜一憂しないで、自分を客観視して、自分の考えが正当だと思えば主張すればよいと思います。研究者には競争が伴いますので、性別は関係なく、結局は本人の努力次第だと思います。ただし、女性には妊娠・出産・育児が伴うので、その場合は分野の部屋全体でサポート体制を作ればよいでしょう。また、在宅でできる仕事もあるので、育児等で大変な場合は在宅勤務も取り入れて、ブランクをなるべく少なく出来るように工夫していけばよい。これは教授として、また所長としての思いです。

## 研究支援員配備事業について

平成21年度より、出産・育児等、あるいは女性特有の疾患によりキャリア継続に困難を感じている女性研究者に研究支援員を配備する「研究支援員配備事業」が全学に対象者を拡大して行われています。6月末の公募に22名の応募があり、以下の10名が採択されました。研究支援員採用に時間がかかった方もおり、実際にこの事業が動き始めたのは9~11月になりましたが、本事業により、研究者や研究室全体にどのようなインパクトがあるか、などを検証しています。



後列左から成瀬さん、大野さん、Olhaさん、黒川さん  
前列左から太田さん、美濃さん、東さん

### 採択者名と研究テーマ

- ◆Department of Cellular Physiological Chemistry  
助教 **Safronova Olhaさん**  
「低酸素下におけるサイトカイン産生変動の機序解明」
- ◆医学部附属病院検査部  
助教 **東亮子さん**  
「心疾患の病態解析・治療判定効果における三次元経胸壁心臓超音波検査の有用性の検討」
- ◆大学院医歯学総合研究科血液浄化療法部(腎臓内科学)  
助教 **太田英里子さん**  
「膵臓腺房細胞に発現しているアクアポリン12(AQP12)の機能解析」
- ◆大学院医歯学総合研究科眼科学  
准教授 **大野京子さん**  
「加齢黄斑変性における発症分子機構の解明」
- ◆難治疾患研究所生体情報薬理学分野  
准教授 **黒川洵子さん**  
「不整脈の性差の分子メカニズム」
- ◆歯学部附属病院 インプラント・口腔再生医学  
医員 **中田秀美さん**  
「Msx1 遺伝子の調節エレメントの解析と組織再生の可能性の検討」
- ◆難治疾患研究所分子病態分野  
特任助教 **成瀬妙子さん**  
「MHC関連遺伝子群のゲノム多様性解析」
- ◆医学部附属病院皮膚科  
助教 **西澤綾さん**  
「皮膚血管肉腫の新規遺伝子治療の開発」
- ◆大学院保健衛生学研究科精神保健看護分野  
准教授 **美濃由紀子さん**  
「グループ・スーパービジョン機能を用いた精神科看護事例検討会の方法論的意義」
- ◆歯学部附属病院顎顔面補綴学分野  
医員 **村瀬舞さん**  
「顎顔面補綴患者における術前・術後評価に関する研究」



今号では、採択者のおひとりである大学院医歯学総合研究科眼科学分野・大野京子准教授に、実際にどのように活用されているか、お話を伺いました。

#### 「研究業務のトータルサポートをお願いしています」

——准教授として、研究に加え、診療、手術、教育など、これまでは様々な業務に時間を費やさざるを得ない状況でした。研究支援員の方にサポートをお願いしてからは、自分の研究計画を考えたり、まとまって何かをする時間が作れるようになりました。具体的には、実際の実験手技に加え、文献検索や業績管理など、研究にまつわる作業のトータルサポートをお願いできるようになり、とても助かっています。

#### 「子供と過ごす時間や、母を介護する時間が増えました」

——外来のある日は、朝から晩まで診療を行い、帰宅するのは深夜になることも頻繁でした。小学生の子供はすでに寝ている時間ですので、平日に子供と話せるのは朝の出勤前だけということもありました。研究支援員の方がいらしてからは、20時台に帰宅できる日が週に何日か増えましたので、夕食は無理としても就寝前に子供と学校のことを話したり、宿題を見る時間が増えたのは嬉しいことです。また、介護中の母が急に肺炎を起こした際にも、研究支援員が自分の代わりに業務を進めてくれたので、こんなときには大きな安心を感じています。私にとってはなくてはならない存在です。

#### 「共に成長する関係に」

——研究支援員の方は、もともとの技能を生かして即戦力として動いてくれていますし、また同時に、色々な技術を学びたいという積極的な姿勢があります。そのため、私も研究

支援員も、共にスキルアップし、成長していくことができるため、お互いにやりがいを感じています。

#### 「子供を産んでも働き続ける環境が出来ました」

——実際に優秀な女性が入局しても、出産で離職してしまうことが多く、講師以上で出産後も研究を続けている本学の女性医師は少ないのが現状です。この事業には、「出産したから」「育児があるから」と、働きたくても諦めている人を救う意味があると思います。研究支援員を配備することは、一人あたりの作業分担を減らすだけでなく、職場全体の労働環境の改善につながっていくので、男性医師にとっても得るものは大きいのではないのでしょうか。また、この制度が定着すれば、学内の女性教員割合の増加にもつながっていくと思います。本制度のことを他大学の眼科医に話すとともに羨ましがられます。本学にはこのような素晴らしい支援システムがあるということが、学外にも広まれば、本学で働きたい女性ももっと増えていくように思います。

#### 「今後の制度化に向けて」

——本格的に制度化していくには、本学において、「出産後の女性もトータルにサポートして、その後のプランも一緒に考えます」といった目標を打ち出すのはどうでしょうか。そのためには、学部時代から、今後の人生プランについての早期教育をし、研究支援員のニーズを明確にして行くのがよいと思います。もちろん、実際に支援を受けている私たちが業績を増やして、今後の研究支援員のニーズの確保につなげていく努力が大切であると考えています。また、この制度には感謝しています。

## 「施設型病児保育の体験ツアー」を開催しました。

本学において、平成21年より「派遣型病児保育モデル事業」を開始しており、NPO法人フローレンスと共同で、病児保育 medical&academic版の開発に取り組んでいます。

そこで、病児保育が実際にどのように行われているかを体験するために、平成21年9月16日(水)にNPOフローレンスが運営協力をしている、「まちかど保健室みなと」(港区南青山)に体験ツアーに行って参りました。参加したのは、歯学部歯学科4年の笠原由紀さんです。

笠原さんはこの病児保育施設について、「働く母親にとっては、心強い味方です。また施設のスタッフの方々の中には、家庭を持っている女性も多いようでした。安心して子育てをするためには、女性同士でサポートし合うような、よい循環システムがあることが理想的だと思います」とコメントしていました。



## 「保育に関する調査」結果のご報告

女性研究者支援室で、8月6日から21日に行いました、「保育に関する意識および現状調査」にご協力いただきありがとうございました。その概要をご報告いたします。

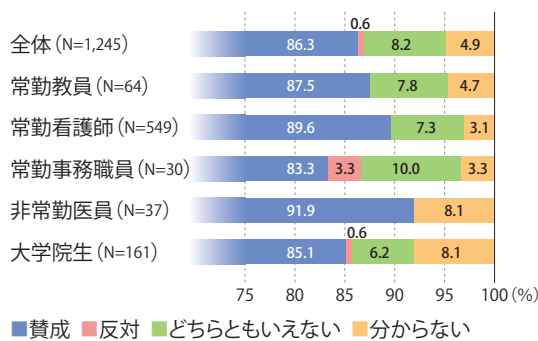
対象者4,560人、有効回答者1,887人、有効回答率41.4%でした。学内一般保育施設設置の賛成率は、女性86.3%、男性73.7%、学内病児保育施設設置の賛成率は女性73.9%、男性56.7%でした。現在0歳から就学前までのお子さんがいる方、あるいは1年以内にお子さんを持つ予定の方が、学内一般保育施設があったらお子さんを預けるという回答は、71.7%、病児保育

施設があったらお子さんを預けるという回答は54.8%でした。

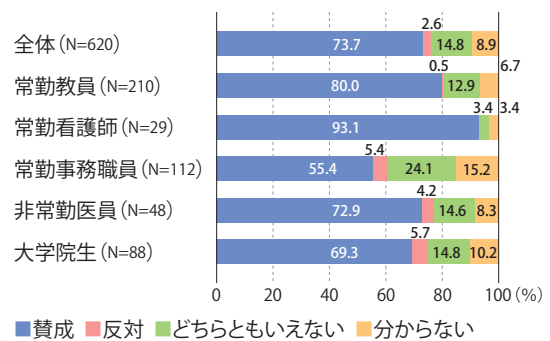
一般保育施設に入所希望年齢は0歳から6歳まで、運用時間は8時から18時が最多でしたが、24時間保育希望が29%ありました。

学内保育施設の設置は教職員の離職防止、学生の学業中断に役立つという回答は、女性83.0%、男性70.7%、ワーク・ライフ・バランスに役立つという回答は、女性66.6%、男性55.2%、人材確保に役立つという回答は、女性81.4%、男性74.4%でした。詳細データは、当室ホームページをご覧ください。

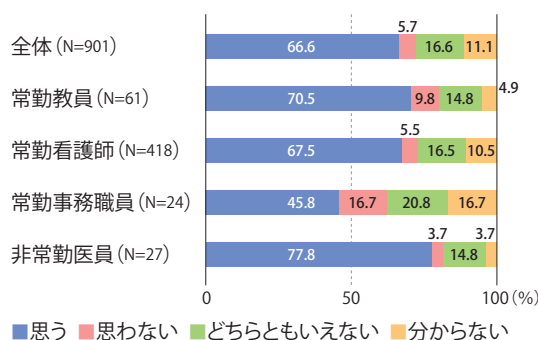
● 図1 女性の一般保育施設への賛否



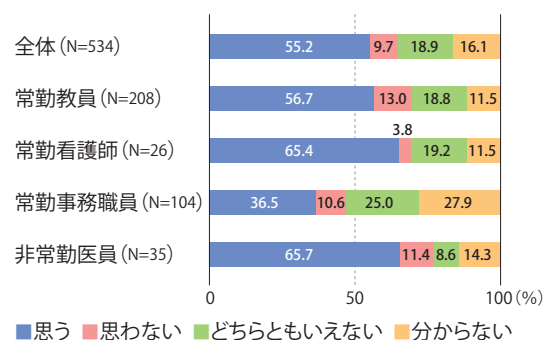
● 図2 男性の一般保育施設への賛否



● 図3 〈女性〉保育施設の設置は教職員のワーク・ライフ・バランスに役立つと思うか



● 図4 〈男性〉保育施設の設置は教職員のワーク・ライフ・バランスに役立つと思うか





## 学内保育施設「わくわく保育園」が 近々オープン致します! ~学内保育施設の説明会のご報告~



本学では、教職員および学生の仕事・学業と子育ての両立支援や、ワーク・ライフ・バランスの実現をサポートするため、平成22年4月に学内保育施設「わくわく保育園」を開設することが決まりました。

そこで、平成21年12月24日(木)に、総務部職員課の主催のもと、歯学部特別講堂4階にて「保育園説明会」を開催しました。午前の部と夕方の部の2部制に分けて実施したところ、お子様連れの方も多数お見えになりました。60人を超える方々が出席され、賑やかなムードで開催することができました。

### 【保育施設概要】

場 所：湯島地区6号館1階  
定 員：27名

(0歳児:9名 1歳児:9名 2歳児:6名 3歳児以上:3名)

対 象 児：生後57日以降、就学前まで

利用対象者：本学教職員及び学生

休 園 日：土・日曜日 祝祭日 年末年始

保 育 時 間：基本保育時間7時30分～18時00分、  
延長保育時間7時00分～7時30分  
18時00分～20時00分

運 営 業 者：株式会社 pigeon hearts

<http://www.pigeonhearts.co.jp/>

利 用 料 金：現在検討中です。

※保育園の詳細につきましては、次号にてご案内致します。

## 「仕事と暮らしの両立に関する情報交換会」を開催しました。

平成21年9月30日(水)に、「仕事と暮らしの両立に関する情報交換会」が開催されました。

ファシリテーターとして、大学院保健衛生学研究科 高齢者看護・ケアシステム開発学の山本則子教授、分子病態検査学の熊谷二郎准教授、吉田祥子助教、在宅ケア看護学の木村正隆講師を迎え、「仕事と暮らしの両立のために、日頃どんな工夫をしているか」をテーマに活発な意見が交わされました。具体的には、「家庭内で子育てに対して、夫婦でどのような協力体制を組んでいるか」、「男性と女性とでの家事の分担方法」、「乳児を抱えて仕事復帰をした体験談」、



「保育園とのお付き合い」、「父親としてこのように育児に参加した」等の様々な情報交換がなされました。

また、大学への希望として、「病棟以外にも搾乳室を設置してほしい」という声も聞かれました。

## 「働く女性を妻に持つ男性歯科医師・ 研究者の本音を聞く会」を開催しました。

平成21年11月25日(水)に、「働く女性を妻に持つ男性歯科医師・研究者の本音を聞く会」が開催されました。

話題提供者として歯科臨床研修センターの新田浩副セ



ンター長を招き、働き続ける女性のパートナーとしての「本音」について、ディスカッションが交わされました。

その中で、女性が出産後も働き続けるための3つのキーポイントは、①女性側の働く意欲、②パートナーの協力、③育児のサポート(特に病気のとき)、と提案がなされました。更に、女性の働き続ける意欲や女性が職業を持つことへの男性側の理解は、個人の育った家庭環境や個人の価値観とも深く関わっている、とのディスカッションがなされました。

## 「第2回性差医学・医療セミナー」を開催しました。



女性研究者支援プロジェクトの中で、「意識改革事業」を重要な柱として活動を行っております。

その事業の一環として、連続開催を行っている性差医学・医療セミナーですが、平成21年10月1日(木)に第2回セミナーを開催いたしました。講師に東京医科歯科大学難治疾患研究所から石野史敏教授を招き、“Why do we need our parents? Genomic imprinting: imprinted genes and its regulation”をタイトルとして講演がなされました。エピジェネティクスの観点から、「なぜ私たちに父親と母親は必要であるのか」、そして「父親・母親由来で発現する遺伝子群とその制御機構」についての講演がなされました。

## 「第3回性差医学・医療セミナー」を開催しました。

平成21年11月24日(火)に、第3回性差医学・医療セミナーを開催しました。講師に東京大学大学院農学生命科学研究科 獣医解剖学の金井克晃准教授をお招きし、“How does God make a boy or a girl? Molecular and cellular mechanisms of SRY function in gonadal sex determination”「私たちの性はどのように決まるのか? Y染色体の性決定遺伝子SRYによる一次性決定の分子機序」をタイトルとしてご講演がありました。

本講演では、哺乳動物のY染色体の性決定遺伝子SRYによる一次性決定の分子機序と一次性決定後の性腺の性の可塑性に対する性ステロイドホルモン、MISなどの液性因子による影響について

ご紹介し、哺乳類の性決定機構の進化についてもご考察されました。ご紹介された様々な研究成果は、哺乳類独自の性決定の仕組みの獲得とSRYの時空間的な作用機序の深い理解に繋がり、ヒトの様々な性分化異常症の理解と治療への応用へ直結するものと考えられました。



## 「第4回性差医学・医療セミナー」を開催しました。



平成21年12月17日(木)に、第4回性差医学・医療セミナーを開催しました。日本医科大学大学院医学研究科システム生理学分野 医学部生理学講座の佐久間康夫教授をお招きし、“When and how different are the brains of males and females? Evidence which warrants scientific study on brain sex differences”をタイトルとしてご講演がなされました。

佐久間教授は、「哺乳類の雌雄の動物の行動には目立った性差があり、行動の性差が脳の何らかの性差を反映していることが推測されるが、ラットにおいては、脳の幾つかの部位に見られる形態的な性差や、雌雄で見られる神経細胞の電気生理学的相違と特定の機能の関連に関する知識は、意外なほど少ない」と述べられました。

また、「行動が外部環境、血中ホルモン濃度等の体内の条件に大きな影響を受けることも、脳と行動の関連の理解を難しくしている」とご発表され、脳は性によってどう違ってくるのか、また各性別に適切と思われる行動の決定因子は、成長に伴って得た学習によるものなのか、環境なのか、あるいは性差なのか、まだ解明されていないとし、今後の脳の性差研究のめざしているものについても述べられました。



## 「平成21年度教育文化週間 市民公開講座」を開催しました。



平成21年11月2日(月)に、難治疾患研究所 幹細胞医学分野から西村栄美教授を招き、平成21年度教育文化週間市民公開講座を開催しました。タイトルは「なぜ白髪になるのか?幹細胞とエイジングについて～個性を生かしたユニークな研究を育てよう～」とし、加齢に伴って色素幹細胞が量的質的に変化し枯渇すると白髪になる仕組みについて、講演が行われました。

また、西村教授自身の女性研究者としての経験を話し、これまで医学を志したきっかけや、大学や留学先での恩師や共同研究者との出会いが語られ、若手研究者の今後の指針についても述べていました。市民公開講座でもあったため、学外の方々にもご参加頂きました。

## Career Support

### キャリア支援事業のご報告

#### 1 「自分を知らう!キャリアワークショップ」を連続開催しました。

当室のキャリア支援事業の一環として、平成21年11月6日(金)・13日(金)に、2回連続開催で「自分を知らう!キャリアワークショップ」を行いました。講師は女性研究者支援室の有馬牧子特任助教(日本生産性本部認定・キャリアコンサルタント)が務め、これからのキャリアを築いていくために必要な、「自分自身を理解し、自分の価値観を知る方法」について紹介しました。

ワークショップ第1回は、「キャリアを見つけるポイント」について説明し、「価値観カード」を用いて自分の価値観を知り、仕事やプライベートなど、どんな状況で心

のモチベーションが上がるかについても検討しました。

2回目のワークショップでは、「人生における変化の対応方法」をテーマとし、「心の変化のプロセス」を知ることで、心の変化は、段階を経て順応して行くことをご紹介しました。参加された方々からは、「自分自身を客観的に見る事が出来るようになった」「連続で出席して、モチベーションが上がった」とのコメントを頂くことが出来ました。



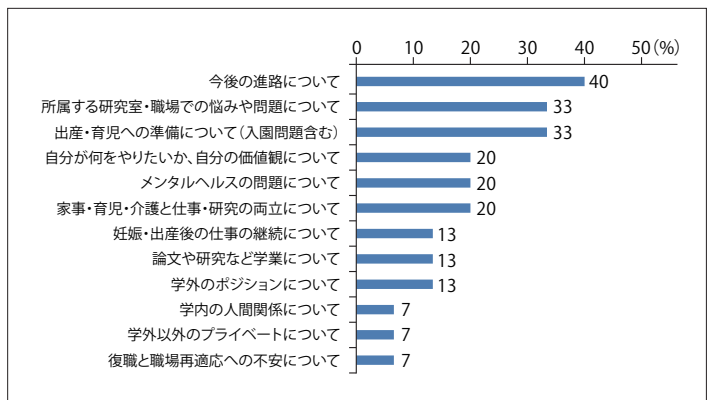
#### 2 「キャリア相談室」までご相談ください。

7月からキャリア相談室がオープンしています。教職員・学生を含む、学内の多くの方々が相

談が難しい」という内容も寄せられています。

有馬特任助教が相談をお受けしますので、お気軽にご相談ください。申込は、<http://www.tmd-angel.jp/soudan>にてお受けしています。

談にお見えになっており、今後の進路や、研究と育児・家事との両立など、様々な相談をお受けしています。これまで寄せられた相談内容をご紹介しますと、「今後研究を続けていくのか迷っている」が最も多く、次いで「所属する研究室で・職場での悩み」、「保育園入所問題や、出産・育児への準備」、がほぼ同じ割合で多い状況でした。次に、「自分の価値観、自分が何をやりたいか」、「家事・育児と仕事との両



## 「研究室の環境調査」結果のご報告

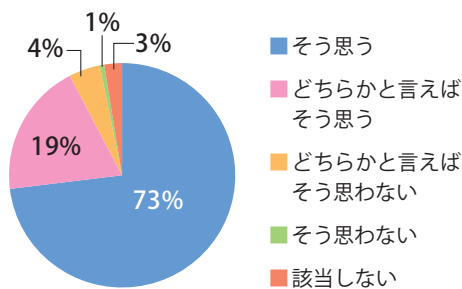
女性研究者支援室において、2009年6月から8月にかけて行われました、「研究室の環境調査」にご協力いただきありがとうございました。男女ともに各研究室において快適に研究を進められる環境が整っているかを把握し、今後更なる環境改善に繋げていくための第一段階として、当調査を行いました。

調査対象者は難治疾患研究所・生体材料工学研究所・疾患生命科学研究部の全教職員と大学院生、計386名で、インターネットでの無記名のアンケート調査を実施しました。設問には、①組織公正性、②指導者支援力、③同僚との関係・支援、④仕事の裁量度、⑤妊娠・出産・育児への理解、⑥ワーク・ライフ・バランス・研究・健康への満足度を指標といたしました。

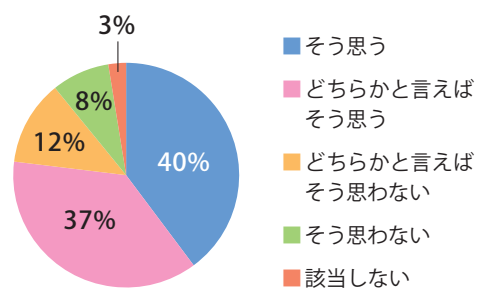
集計の結果、156名から回答を得て、回答率は40.4%でした。

回答率を組織別に見ると、難研では教職員の40%、生材研では教職員の25%、大学院生では48%が回答していました。「研究室では男女公正に、主張すべきことを事由に話し合える」との回答は73%、「研究室主任は、教室員の考えや気持ちを聞いて、理解していると思う」との回答は40%でした。また、「研究室での作業や連絡等について、男女公正な協力関係があると思う」は62%、「研究の実情に応じて、柔軟に勤務時間帯を決められる」は54%、「研究室では、男女ともに育児中も研究継続のための理解が得られると思う」は44%、「自分のワーク・ライフ・バランスが取れている」は25%でした。詳細については、当室ホームページをご覧ください。

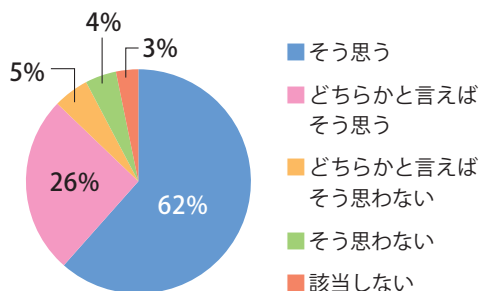
● 図1 研究室では、男女公正に主張すべきことを自由に話し合える(組織公正性)



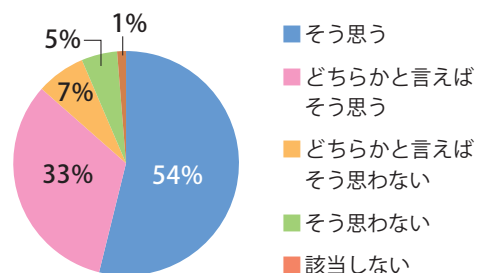
● 図2 研究室主任は、教室員の考えや気持ちをよく聞いて、理解していると思う(支援力)



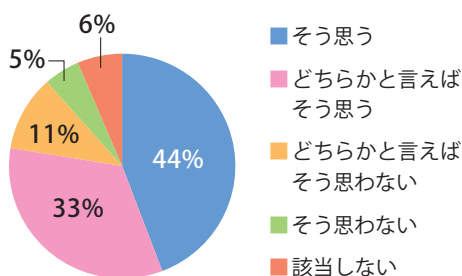
● 図3 研究室での作業や連絡等について、男女公正な協力関係がある(同僚間支援)



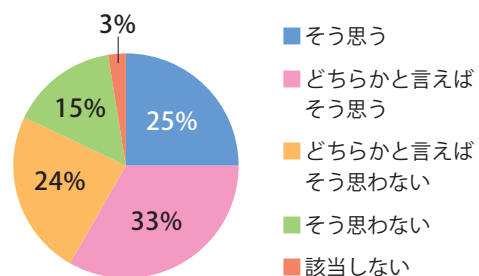
● 図4 研究の実情に応じて、柔軟に勤務時間帯を決められる(裁量度)



● 図5 研究室では、男女ともに育児中も研究継続のための理解が得られると思う(妊娠・出産・育児への理解)



● 図6 自分のワーク・ライフ・バランスが取れていると思う(ワーク・ライフ・バランス評価)



## 「女性研究者支援システム 改革プログラム事業合同シンポジウム」に参加しました。

平成21年11月25日(水)・26日(木)に女性研究者支援システム改革プログラム事業合同シンポジウム「女性研究者支援の新時代を迎えて」に参加して参りました。

日本学会館・2階大講堂にて開催され、開催1日目の午前中にはポスターセッションが行われました。各モデル校・組織

が事業内容をポスターにまとめて掲示しました。本学の取り組みについても多くの方々から足を止められ、ご質問が寄せられていました。午後の部は、平成19年度採択の10機関(東京大学など)、平成20年度採択の13機関の取り組み報告と質疑応答がなされました。



開催2日目には、平成21年度採択の12機関の取り組み報告、続いて女性研究者養成システム改革加速事業の採択5機関(京都大学や東北大学など)の取り組み報告がなされました。この加速事業に採択されたのは、平成18年度に女性研究者支援事業に採択され、継続した支援への取り組みが認められた機関です。各報告の終了後には、「保育」と「加速事業」をテーマに分科会が2つ設けられ、保育の分科会では、荒木葉子 女性研究者支援室特任教授から「本学における派遣型病児保育の取り組み」についてご報告致しました。

## 「健康・多様性・生産性を高める ワーク・ライフ・バランス施策～産・学・病院の挑戦～」シンポジウムを開催しました。

平成21年12月3日(木)に、東京ガーデンパレスにて「健康・多様性・生産性を高めるワーク・ライフ・バランス施策～産・学・病院の挑戦～」シンポジウムを開催いたしました。

開会の挨拶として、谷口尚副学長から本学におけるワーク・ライフ・バランス施策の重要性や展望が述べられました。続いて、岡島敦子 内閣府男女共同参画局長から基調講演を賜りました。ご講演として、宇野晶子 株式会社資生堂 お客さま・社会

リレーション部次長から「資生堂におけるワーク・ライフ・バランスの取り組みについて」、赤津恵美子 ノバルティスファーマ株式会社 ダイバーシティ&インクルージョン室室長から「ワーク・ライフ支援施策と実践事例」、有賀早苗 北海道大学女性研究者支援室室長/大学院農学研究院教授から「女性研究者支援から見えてきたワーク・ライフ・バランス」、脇坂明 学習院大学経済学部教授から「病院におけるワーク・ライフ・バランス—企業と比較して—」について、それぞれご発表がありました。

後半のパネルディスカッションでは、実際に組織にワーク・ライフ・バランス施策を取り入れるための方法について質疑応答が交わされました。最後に、閉会の辞として北嶋繁孝 難治疾患研究所所長から、企業・病院・大学の各組織での実際のワーク・ライフ・バランスの取り組みを参考にして、本学で具体的に実施していく可能性について力強い提案がなされました。



編集・発行

### 東京医科歯科大学 女性研究者支援室

Activation of Gender Equity / Gender Medicine and Enrichment of Life (Angel Office)

〒113-8510 東京都文京区湯島1-5-45 3号館4階 477号室

E-mail: info.ang@mri.tmd.ac.jp TEL: 03-5803-4921 FAX: 03-5803-0246

http://www.tmd.ac.jp/mri/ang